

建設時評

令和の時代

東北大学 災害科学国際研究所

准教授 平野勝也

平成という時代が終わり令和という時代に入った。平成を総括するには筆者の教養は不十分に思うが少しだけ書いてみようと思う。昭和は、戦争に突入し多くの都市を焼け野原にされ、そこから経済も人口も目覚ましい成長を遂げてきた時代だった。平成は、早々にバブルが崩壊して以降、経済は低迷し、人口も平成の半ば2004（平成16）年が折り返し点となり人口減少局面に突入した時代であった。そうした大きな時代の転換点にあった平成は、大規模災害が度重なる時代でもあった。思いつくまま上げていっても、雲仙普賢岳の火砕流から始まり、北海道南西沖地震・津波、阪神・淡路大震災、三宅島噴火、新潟県中越地震、岩手宮城内陸地震、そして2011（平成23）年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故。その後も栄村大震災、伊豆大島土砂災害、紀伊半島豪雨、広島土砂災害、熊本地震、九州北部豪雨、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振東部地震と続いた。自然災害に激しく揺さぶられながら、経済も人口も大きな転換を迎えた日本全体にとってまさに潮目となる時代が平成であったように思う。

そんな背景のもとに、都市や街も大きな潮目を迎えた時代であった。昭和は増え続ける人口に都市を拡大し、都心を高層化していく、まさに開発の時代であり、多摩ニュータウン

等々、様々な工夫が凝らされた開発が都市開発史を飾っている。時代が平成に入るとバブルは崩壊し、経済の低迷にあわせ開発も抑制的になり、経済のためではなく、住民のための事業、すなわち「まちづくり」が企図されるようになった。街の歴史を大事に繙きながら、ちょっとした街角広場の整備といった小さな事業を紡ぎ合わせ、民間も巻き込みながら誇りや愛着を持てる街へと住民とともに少しずつ街をよくしていくことが行われ始めた。平成も終わり頃になると、そうした取り組みが持続的になるように、木下斉らにより、稼ぎながら街をよくしていくことも公民手を携えて行われ始めている。人口減少の局面に入り、清水義次らにより資産を活かした空き店舗や空き家のリノベーションまちづくりも行われ始めている。

* * *

令和の時代、日本は経済的な大転換を迫られ、地方は間違いなく熾烈な生き残り競争の時代を迎える。その中で重要になるのは地域経営の観点だと思う。地域のあらゆる資源を活用して地域の価値を高めつつ、大幅なコストカットを同時に行う必要があるからだ。地域の価値を高める上でも、コストカットを行う上でも、社会基盤の担う役割は極めて大きい。地域の価値を高めるような魅力的な空間づくりは、美しい水辺、晴れやかな目抜き通り、猥雑な裏通りといった公共空間である社会基盤施設抜きには語れない。地域資源を生かすための新しい社会基盤も発明していく必要があるだろう。コストカットの側面においても、もちろん義務的経費である社会保障関係を間接的に縮減する経営センスも相当に重要であるが、直接的に縮減が可能な投資的経費である社会基盤の維持管理費は、地域経営の根幹を握っている。例えば、地域経済を支える幹線道路を4車線化して効率を高める一方で、それ以外の道路は、廃止を含めて徹底的にグレードダウンしていく等、戦略に基づく徹底した社会基盤システムの構造変更が必要であろう。中心市街地は、公民連携を図りながら豊かな公共空間の再創造をしていき、郊外からの撤退を実現していく必要がある。こうし

た政策を進めていくためには、地域の社会基盤施設を一元管理する行政体が必須である。現行の、国・都道府県・市町村というガバナンスのあり方では、こうした地域で断行すべき改革とのズレが大きすぎるように思う。

* * *

東日本大震災から8年となった。津波被災地の多くで、新しい街が最後の仕上げを残しつつも、形となって現れてきている。街が多様であるように復興も多様である。街に関わる人は、この多様な復興を東日本大震災の津波被災地に限らず、各地の復興を必ず見て回って欲しいと切に思う。なぜならそこに、我々のまちづくりの水準の「今」が析出しているからである。全国の被災地の復興を巡り、令和時代への布石として、良い方向の復興となっているのか考えてほしい。正直に言えば、叡智を集めて取り組んだはずの復興の結果は、必ずしも良いものとは思えない。もちろん8年間関わり続けた筆者にも大いに責任がある。だからこそ、それぞれ多様な復興が、的確に地域の価値を高め、戦略に基づいた社会基盤システムの構造変更に至る復興となっているのか、そうした観点から復興の「質」について語るべき時期に来ていると思っている。

ようやく、今回の復興制度については各所から様々な議論が聞こえてくるようになってきた。確かに復興の制度には大いに問題があり被災自治体はおろか、筆者までもが苦勞をしてきたし、筆者も復興の現場経験者として、そうした勉強会に参加したり主宰したりもしている。しかし、令和時代のための本質はそこにはない。同じ制度を使ったはずの東日本大震災津波被災地の復興にも大きく質の差があると感じるからだ。その「差」にこそ、令和時代のために我々街に関わる人間が意識しなければならない点が潜んでいる。人は制度を超えるが、制度は人を超えないのだ。どんなにダメな制度でも、それをかいくぐって素晴らしいものを作り上げた人もいる。その一方で、どれだけ制度をいじっても復興がやりやすくなるだけで、復興の「質」に影響を及ぼすことはない。制度という「手段」と、地

域のあるべき姿という「目的」を履き違えてはならない。今回の復興では「手段」の問題よりも、「目的」の問題の方が大きかったように思う。支援の名の下に昭和の成功体験に基づく「目的」を被災地に持ち込んだ専門家さえもいた。令和時代の良い街とはどういう街か、地域の価値とは何か、地域は人口減少の中で何を指すべきか。そのためにはどんな知識や技術が街に関わる人々で共有されていないかならなければならないのか。令和時代にふさわしい処方箋をどれだけ街に関わる人々が持っているのが本質である。それが共有されていないことが、同じ制度の下で質の差を生んでしまったと街に関わる人間は反省しなければならない。だからこそ、その処方箋を見出すために、共有するために一体我々の何が駄目だったのか、「質」の観点から各地の復興を見直していかなければならないのだ。批評的な視点を持たなければ創造性は生まれない。令和時代は、縮退と向き合う創造的な地域づくりが不可欠である。有史以来、日本の誰も体験したことのない時代なのだから。

* * *

2019（平成31）年3月11日。石巻は大荒れの天気であった。その荒天に象徴されるような被災地の、そして自分なりに走り続けた8年を振り返り、最後の仕上げにも全力を挙げることを、犠牲になられた方々の御霊に手を合わせながら改めて誓った。そして令和時代の創造的な地域づくり、まちづくりのために、何ができるのか。復興は未だ途上ではあるが、改元という時代の節目に日本の地域や街の未来を思う。

そして今、令和という名の下に「我が園に梅の花散る久かたの天より雪の流れ来るかも」という大伴旅人の歌が脚光を浴びている。激動の新時代に、古の歌人が詠んだような四季折々の美しき日本の自然風景が、日本の街や地域に大きく変わりゆく中でも脈々と引き継がれてその価値を高めていく姿を夢想している。日本の街は、どんな時代になっても、そうでなければならない。そのことに変わりはないのだ。大きく変えながら変わらぬものを大切に。そんな新時代の幕開けである。